

八日市地方遺跡の無文土器系土器について

山崎頼人(小郡市埋蔵文化財調査センター)
林 大智(公益財団法人石川県埋蔵文化財センター)

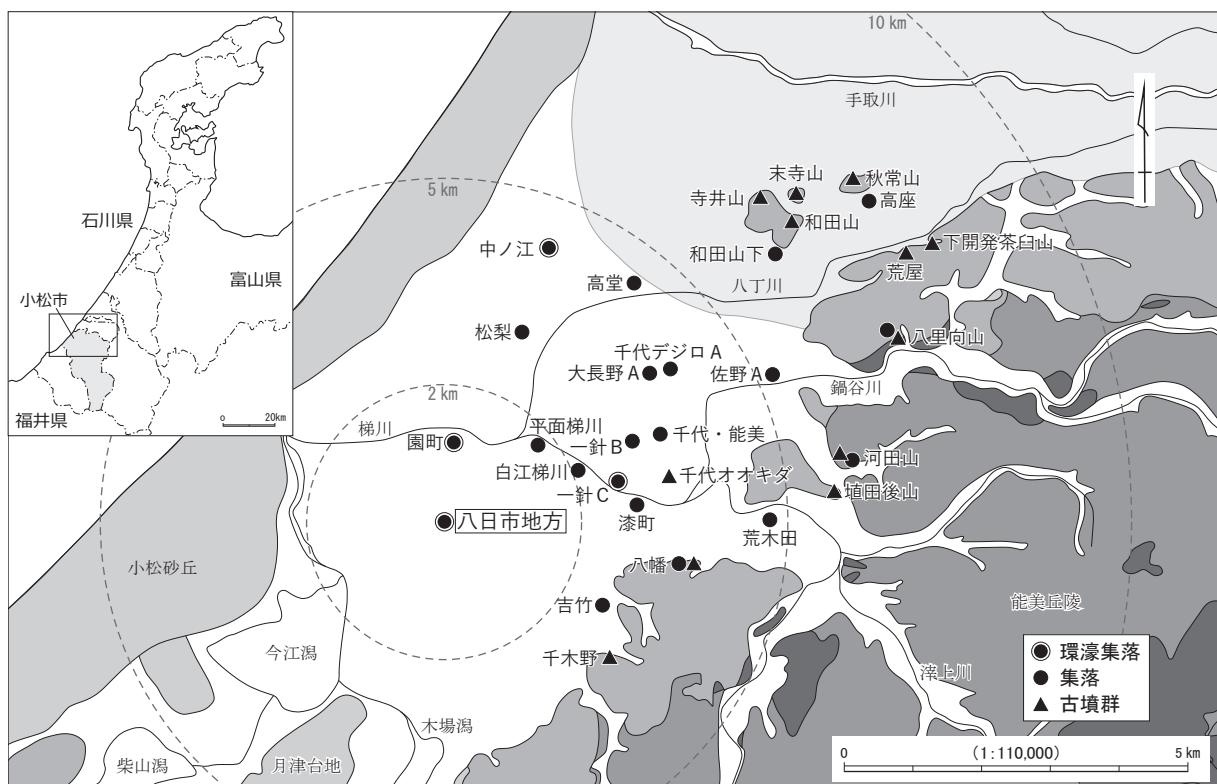
1. はじめに

「柄付き鉄製鉗(ヤリガンナ)」の衝撃的な発見(平成29(2017)年6月5日)から、はや3年半を超える年月が過ぎた。弥生時代中期における鉄器普及の認識に一石を投じる大きな発見となったこの「柄付き鉄製鉗」は、平成27~29(2015~2017)年度に公益財団法人石川県埋蔵文化財センターが実施した北陸新幹線建設に係る小松市八日市地方遺跡の発掘調査で、ボックス型コンテナ1,500箱を超える膨大な遺物と共に出土した。これら多種多様の出土品や密集する遺構群からは、弥生時代中期における生業、モノづくり、精神性などの理解に寄与する豊富な情報を窺い知ることができ、現在、その調査成果を多くの人々に還元すべく、報告書の作成・刊行に向けた出土品整理作業を進めている。

日本国内に新型コロナウイルス感染症がじわじわと広がり始めた令和2(2020)年2月7日、その八日市地方遺跡出土品の整理作業中に林が見慣れない土器を確認した。韓半島南部に特徴的な無文土器系土器(円形粘土帶土器)との関連が想定されたため、国内外の同種資料を対象に意欲的な研究を進めている山崎頼人氏と連絡を取り、資料調査の機会をもつことができた(同年10月27日)。

調査の結果、当該資料は北陸地域で初例となる無文土器系土器と判断された。加えて、列島最東端の出土事例となる可能性が高いことから、資料の重要性を鑑み、議論の深化を目的とした早期の情報公開が必要と考え、報告書刊行前に資料の紹介を行うこととした。

なお、本稿執筆に際しては、1・2を林、3・4を山崎が草稿をまとめ、5は山崎が作成した草稿をもとに、双方協議のうえ林が加筆・修正した。



第1図 弥生・古墳時代における梯川流域の遺跡分布図[縮尺1:110,000](林2012を一部改変)

2. 八日市地方遺跡および出土遺構の概要

八日市地方遺跡は、石川県小松市土居原町、日の出町、こまつの杜地内に所在し、JR小松駅東側一帯にひろがる弥生時代中期を主体とする大規模環濠集落で、遺跡の推定面積は18万m²を超える。

遺跡は、梯川中・下流域に発達した平坦な沖積低地を分断するように形成された標高1～2m程度の南北方向に細長い砂質堆積物からなる微高地の東縁部に立地しており、周辺は、梯川やその支流の合流地点にあたるとともに、干拓事業で消滅・縮小した潟湖（今江潟・柴山潟・木場潟）に囲まれた場所であることから、水運を介した水陸交通の結節点に位置する遺跡として捉えられる。

八日市地方遺跡は、これまで数多くの発掘調査が実施されており、なかでも、小松市教育委員会が平成5（1993）年度～平成12（2000）年度に行った小松駅東土地区画整理事業に係る発掘調査では、集落の中央を東西に貫く川（埋積浅谷）沿いに多重の環濠で囲まれた居住域が確認され、環濠の外側には方形周溝墓を主体とする広大な墓域の存在が明らかとなった。居住域には平地建物、掘立柱建物、井戸、土坑などの施設が密集しており、川の肩部付近からは、複数の貝層（貝塚）や堅果類の貯蔵穴とともに、木製品の未成品や原材料、玉作関連資料などが多数確認され、居住域に隣接した川肩部が、生業に係る多様な加工・処理および貯蔵、生産の場として利用されたことを窺えるなど、北陸随一の規模・内容を誇る弥生時代中期の大規模集落像がこのときに形作られた。

また、これらの調査で検出された遺構や川などからは、数十万点におよぶ膨大な量の出土品が発見され、そのうち1,020点は「北陸地方を代表する、弥生時代中期に盛行した拠点集落の出土品一括として、極めて重要である」ことから、平成23年6月に国の重要文化財に指定されている。

一方、石川県では、平成27～29年度の3ヶ年にわたり、遺跡の西端を南北に縦断して建設される北陸新幹線小松駅舎および路線敷設部分対象の発掘調査（延べ9,730m²）を実施した。なお、調査区のうちA・B・C区は、川の右岸域（北側）にあたる（第3図）。

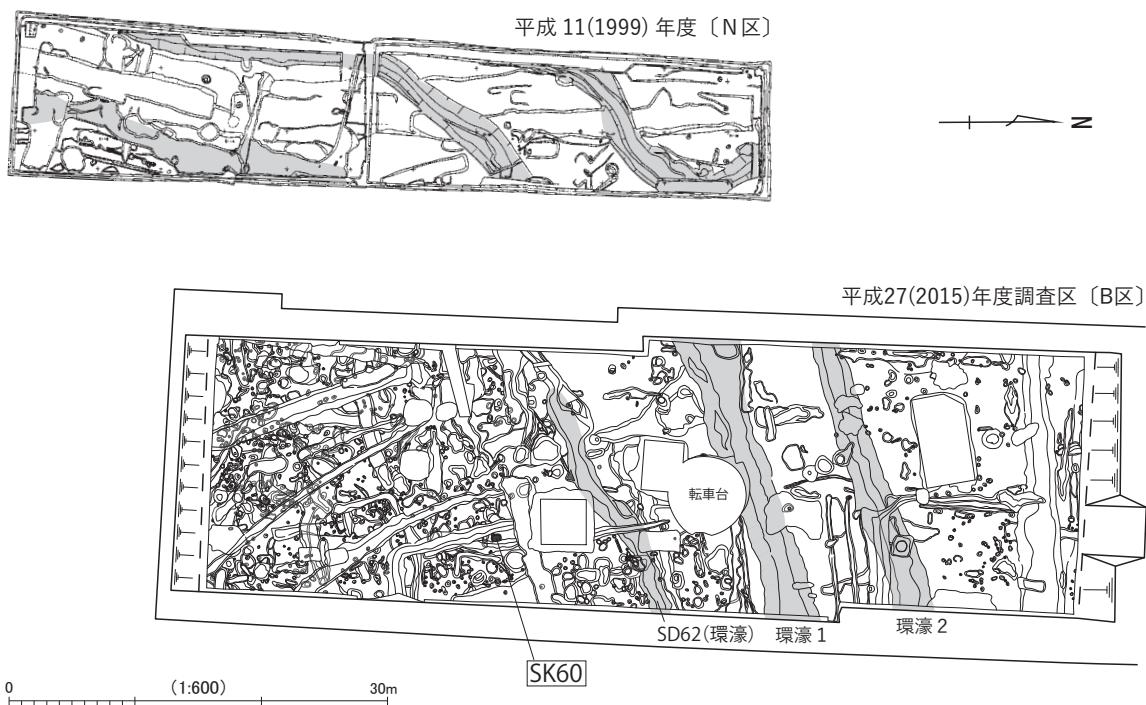
発掘調査の結果、B区とC区北側では、掘立柱建物、平地建物、土坑などが足の踏み場のないほど密集する居住域を確認し、B区中央では、平成11（1999）年度に財団法人石川県埋蔵文化財センターが実施した北陸本線小松駅付近連続立体交差事業に係る発掘調査（N区）につながり、居住域北縁部を取り囲む3条の環濠を検出した（第2図）。居住域の時期は、弥生時代中期前葉～中葉〔八日市地方5～8期（福海・宮田・橋本2003）〕を主体とする。

遺跡の南北両端にあたるA・D区では、ほぼ全域に方形周溝墓を主体とする広大な墓域が認められ、B区北側の環濠間には、環濠掘削土を利用した複数の方形周溝墓を検出した。発掘調査で確認できた30基を超える方形周溝墓のなかには、墳丘の長辺が4m程度の小型墓から15mを超える大型墓までさまざまな規模のものが混在しており、周溝の四隅が途切れるものを主体としている。

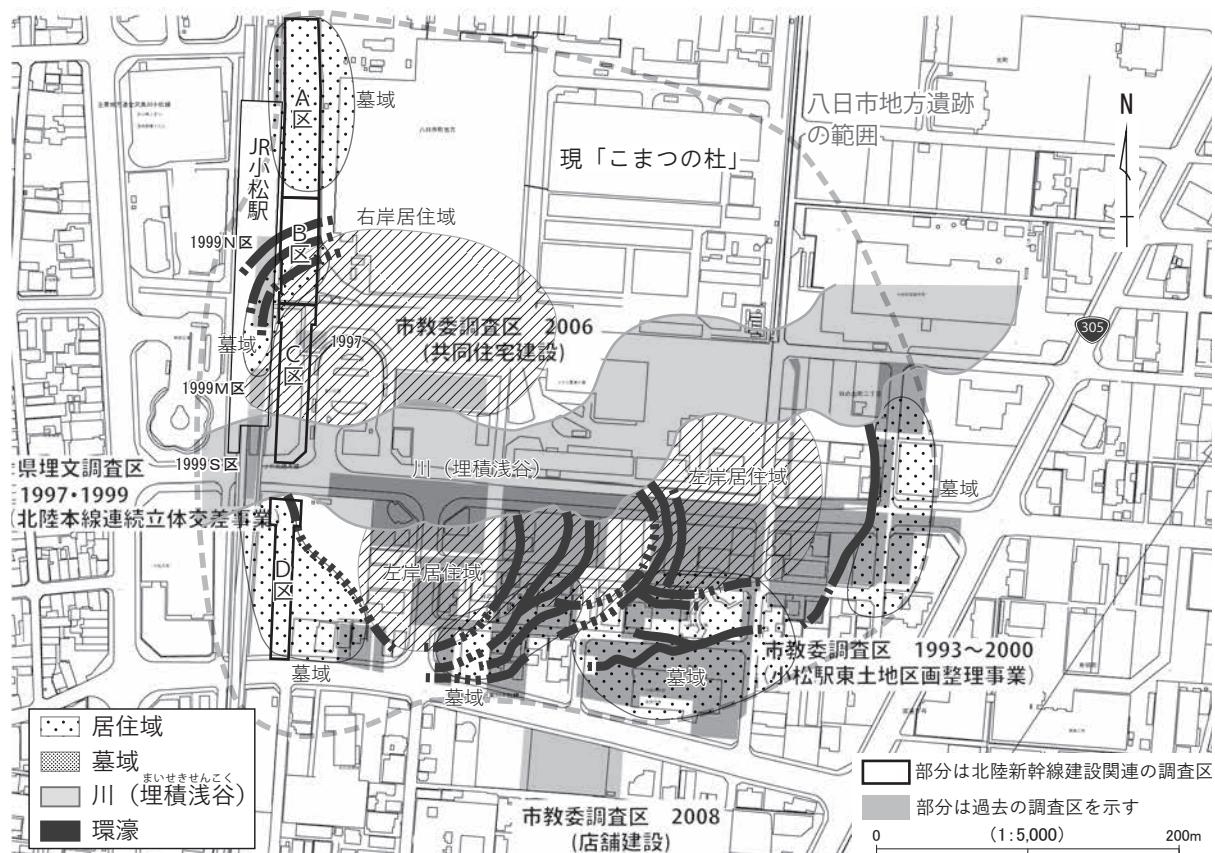
さらに、C区南端では川（埋積浅谷）を検出し、川肩部から川底に向かう緩傾斜地には、玉砂利が敷かれた石敷き遺構、堅果類の貯蔵穴が設置され、緩傾斜地の落ち際には、ヤマトシジミやイワガキを中心とした小規模な貝塚、貯木施設、人為的に剥かれ碎片化した堅果類種皮の集積が認められた。

また、川の堆積層からは、膨大な量の土器、石器、木製品や、碧玉・ヒスイを素材とした玉作関連資料などとともに、「柄付き鉄製鉗」、鑄造鉄斧片と鑄造鉄斧柄、小型青銅器、ヒスイ製垂飾と碧玉製管玉を連ねた装身具、鹿角製アワビオコシなどの稀少な資料も多く出土した。

本稿で詳述する無文土器系土器（第4図）は、B区南側の居住域内に位置するC29グリッドSK60と同グリッド包含層から出土した。SK60は長さ61cm以上、幅79cm、深さ19cmを測る土坑で、東側を溝（SD21）に切り込まれる。覆土中には、当該資料と少量の土器片が共伴しており、時期は八日市地方7期を下限とし、それよりやや古相（6期前後）の土器も含まれている。



第2図 B区（平成 27 年度調査）、N区（平成 11 年度調査）遺構概略図（縮尺：1/600）



第3図 調査区の位置と遺跡概要図（縮尺：1/5,000）

3. 資料の観察所見

公益財団法人石川県埋蔵文化財センターが2015年度に実施した発掘調査で、無文土器系土器（円形粘土帶土器段階）が2点出土した^(註1)。この2点は口縁部の小破片資料であるため判断が難しいが、胎土やつくりから別個体と考えた。

【B区 C29グリッド 包含層出土資料】（第4図1、写真1上段）

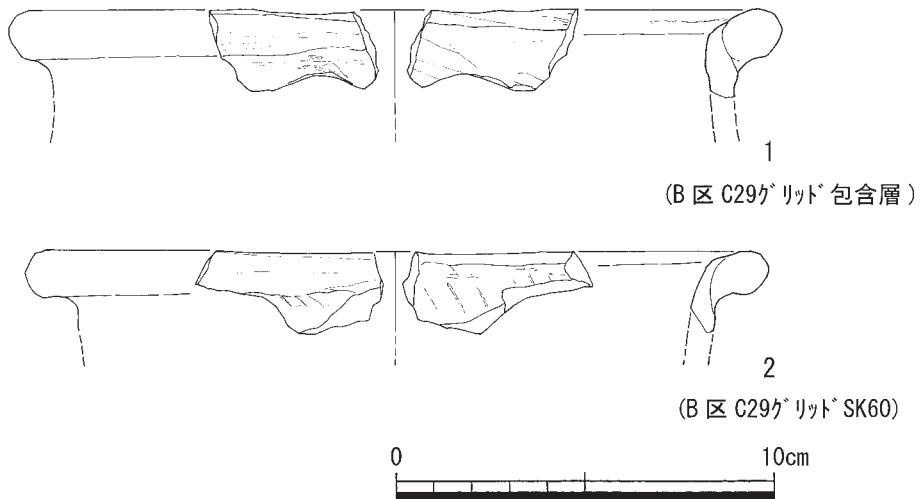
口縁部の破片資料で、復原口径が20.4cm、胴部上位にやや膨らみを持つ小形の甕形土器と考えられる。若干歪みを持ち、部分的には、口縁部がもう少し水平となる傾きも考えられる。

胴部の器壁厚は8mm程度でやや厚い。比較的円形を維持した粘土帶口縁が観察できる。胴部側から短い巻き込みによって粘土帶にかぶせて貼り付けており、その痕跡が所々に段差として確認できる。粘土帶上面、側面を数単位でナデており、複数の面が形成されている。内側ではヨコナデの後に斜め方向の工具のアタリが確認できる。粘土帶下端部分は広いヨコナデで圧着されている。少量の粘土を下端部分に充填し、横ナデによって引き延ばされた痕跡がみられる。色調は淡い褐色を呈し、胎土は素質が粗く、2mm以下の石英・長石・赤色粒等の鉱物粒などを含有する。在地土器と比べて胎土・色調は大きく異なる。包含層出土資料のため、所属時期は定かでない。

【B区 C29グリッド SK60出土資料】（第4図2、写真1下段）

口縁部の破片資料で、復原口径が19.6cm、小形の甕形もしくは鉢形土器と考えられる。若干歪みを持ち、部分的には、口縁部がもう少し上方に立つ傾きも考えられる。口縁部に最大径を持つ器形で、口縁部上端は水平に近い面を持っている。

胴部の器壁厚は6mm程度である。口縁部外面は丸みを持つが、やや上下に押しつぶされて扁平化した粘土帶口縁となっている。胴部側から、やや厚めで短い巻き込みを粘土帶にかぶせて丁寧なナデを施し、それによる、やや凹んだ面を持っている。内側では粘土帶貼り付け時の指オサエとヨコナデがみられ、やや下位では、斜め方向の幅の狭い工具痕が連続する。外側の粘土帶下端部分は内面と同様の幅の狭い工具を押し付けて圧着し、その後ヨコナデによって工具痕を消す。粘土帶部分は上面から側面にかけて複数のヨコナデによって不均一な面を持っている。色調は淡い褐色を呈し、胎土は素質が粗く、2mm以下の石英・長石・黒色チャート等の鉱物粒などを含有する。在地土器と比べて胎土・色調は大きく異なる。SK60では少量の弥生土器片も出土しており、その時期は八日市地方7期（弥生時代中期中葉）を下限とし、八日市地方6期前後の土器も含まれる。



第4図 八日市地方遺跡出土無文土器系土器〔縮尺1/2〕

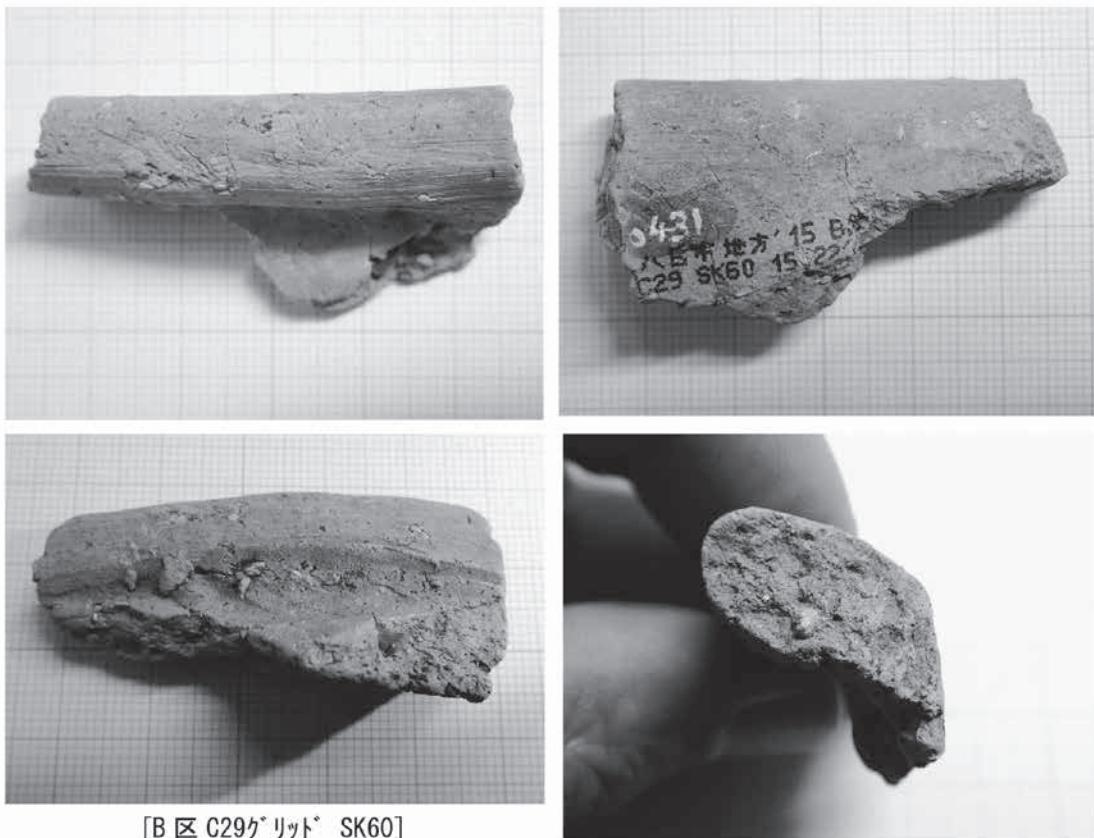
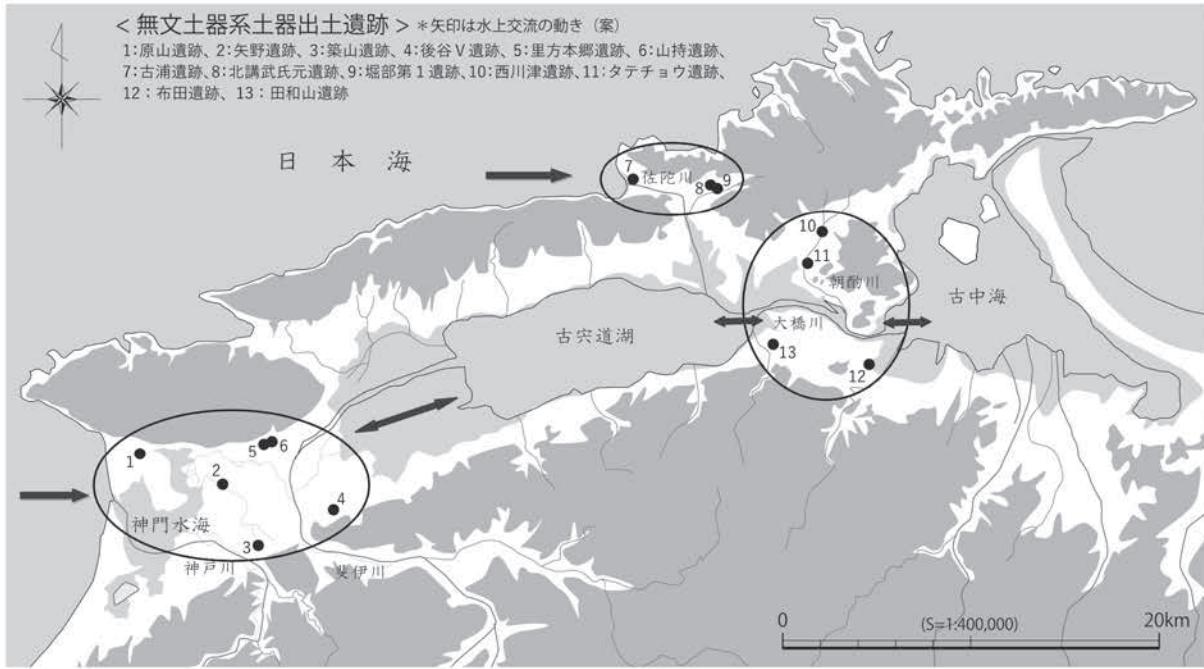


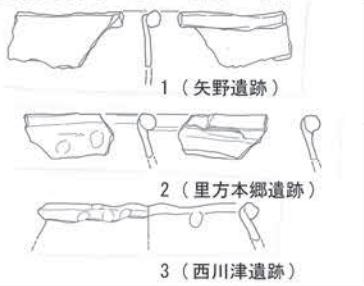
写真1 八日市地方遺跡出土無文土器系土器



<無文土器系土器遺跡>

【第1段階】

【変容初期の無文土器系土器】



【第2段階】

4 (西川津遺跡)

0 10 20cm

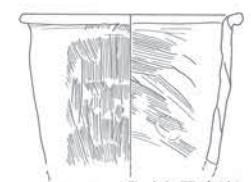
②

①

5 (西川津遺跡)



6 (矢野遺跡)

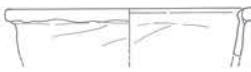


7 (矢野遺跡)

③ [タテチョウタイプ]

9 (山持遺跡)

8 (矢野遺跡)



12 (西川津遺跡)

11 (タテチョウ遺跡)

10 (タテチョウ遺跡)

第5図 出雲地域における無文土器系土器（山崎・原田・岩本2021を改変）

4. 資料の位置づけ

本資料はこれまでに確認されている無文土器系土器（円形粘土帶土器段階）の東限を示す。日本海域で無文土器系土器資料の比較的まとまっている山陰、出雲地域の様相と比較して、八日市地方遺跡

資料の位置づけを検討する。

山陰ではこれまでに50例弱の無文土器系土器（円形粘土帶土器）が確認されている（山崎・岩本・原田2021）。無文土器そのものではなく、変容初期段階のものが流入し、その後、変容が進む（第5図）。無文土器系土器は包含層や自然河道出土のものが多く、出雲第I—2・3様式（松本1992）（弥生時代前期後半）以降、少量の「変容初期の無文土器系土器」と変容が進行した無文土器系土器が多く出土するようになる。

甕もしくは鉢の口縁部資料が多く、胴部側からの擬口縁巻き込みによる粘土帶貼り付けを基本として以下の特徴で分類した（山崎・岩本・原田2021）。

①粘土帶土器特有のつくりで、粘土帶下端をそのまま残すもの（もしくは形状が大きく変わらない程度のナデがあるもの）。

②粘土帶と擬口縁の接合の際に、粘土帶下端をハケ工具やナデによって押し伸ばすもの。

③粘土帶と擬口縁の接合の際に、粘土帶下端と胴部の間に粘土を貼り足して埋めるもの。

特に、③のうち、円形粘土帶をよく残し、粘土帶と貼り足した粘土の間に空隙を持つ例があり、「タテチョウタイプ」とする。

それらの変遷については、以下のように想定できる。

【第1段階】無文土器系土器でも、円形粘土帶土器の口縁部特徴を遺す（口縁部資料のみで、底部については不明）。粘土帶の上端は強いヨコナデによって平坦面を持つものが多く、下端については弱いヨコナデ、もしくはそのままであるもの。里方本郷遺跡例（第5図1）、矢野遺跡例（第5図2）、西川津遺跡例（第5図3）が該当する。いずれも胴部から口縁部にかけてやや内傾する器形である。

【第2段階】無文土器系土器で変容が進むもの。粘土帶の貼付けは胴部・擬口縁からの巻き込みが確認できる。粘土帶と擬口縁の接合を強くするために粘土帶下端をハケ工具やナデによって押し伸ばすもの（②：第5図5～8）や粘土帶下端と胴部の間に粘土を貼り足して埋めるもの（③：第5図9～12）がみられる。②は下端部分の狭い範囲の圧着では断面円形を残し、その押さえ・ナデつけによって円形粘土帶の断面が変形し、下に向けて小さく突出する特徴がある。断面全体が変形するくらいの強い（広い）圧着の場合は断面方形状に変化する。③も同様に断面円形を良く遺す。下端に胴部と粘土帶の圧着用の粘土を付け足してヨコナデによって粘土帶下端の貼り付け痕跡を消すものがあり、接合部にわずかな空隙が遺るものも存在する。特に、この種の特徴を持つ「タテチョウタイプ」は、断面円形から長円形・長楕円形へと変化する動きもみられる。

ちなみに、北部九州での変容は粘土帶下端をそのままにしているもの（①）と城ノ越式土器との影響関係から断面円形を失ったもの（②③の変容が進んだもの）がみられる。断面円形を残した形で、下端を処理する土器が山陰には多い傾向がみられる。

八日市地方遺跡の2例は②（圧着）と③（充填）のタイプがみられる。第4図1は、粘土帶下端に貼り付け粘土を充填して下端を処理している。粘土帶は比較的円形を残しているものの、ナデによって上部はしっかりとした面を持っている。第4図2は、粘土帶下端に工具痕が確認でき、粘土帶下端部分のみを押して圧着し、その後ヨコナデで整えている。側面は丸みを残しているが、粘土帶上部と下部はナデによって面を持っている。八日市地方遺跡例は、出雲地域の西川津遺跡やタテチョウ遺跡例ほど断面円形を残していない印象を持つ。

以上のことから、出雲地域・変容第2段階に相当することが言える。

ここで問題となるのが、日本海地域における無文土器系土器（円形粘土帶土器段階）の所属時期である。北部九州では、板付Ⅱ式から城ノ越式を中心とした時期に無文土器、無文土器系土器がみられ、

山陰では出雲第I—2・3様式（弥生時代前期後半）以降に無文土器系土器がみられる。八日市地方遺跡の2例は八日市地方7期（弥生時代中期中葉）を下限とする時期で、やや開きがある。それぞれの所属時期の検討、無文土器系土器を軸とした各地域の併行関係の検討は今後の課題である。

5. 課題と展望

今回報告する資料の発見を契機に、これまでに報告された資料を見直すと、八日市地方遺跡では他の調査地点でも無文土器系土器が出土している^(註2)。さらには、八日市地方遺跡だけでなく周辺の遺跡でも無文土器系土器が出土する可能性が十分考えられる。特に、日本海沿岸の天然の良港である潟湖周辺に立地し、港津と考えられる集落はその候補になるであろう。

北陸地域における無文土器系土器の出土は、無文土器系土器とその文化を携えた集団が日本海ルートで往来し、交流を持つことを示すが、今後、弥生土器との共伴時期や無文土器系土器とどのような遺物や遺構がセットで北陸地域へ伝播するのかが重要である。層灰岩製扁平片刃石斧の分布（佐藤・宮田2018）や金属器（片）の流通（吉田2010・2013、山崎2015）、そして、玉つくりとその流通からうかがえる地域間交流（河村2018）とも関連することが窺える。韓半島金属器文化の到来は中期以降に顕著となる集落の拡大や拠点集落の形成（安2009）にも影響を及ぼしているだろう。

ここで北陸地域における鉄器導入期（弥生時代中期）の様相を概観すると、八日市地方遺跡では、弥生時代中期中葉古段階（八日市地方6・7期）に柄付き鉄製鉈（写真2）や鋳造鉄斧片、鋳造鉄斧や鉄ノミの木製柄（第6図）、木材に遺された鉄製工具による加工痕がみられることから、この時期を明確な鉄器導入期と把握できる。続く中期後葉には、八日市地方遺跡で鋳造鉄斧柄の出土量が増加し、装着を推測できる鉄斧のバリエーションが豊富になるとともに、木材に残された鉄製工具による加工痕も増加する（下濱編2016）。また、他遺跡では、小地域の中核的集落や流通の拠点となる集落で鉄器が偏在的に出土する傾向を窺え（林2017）、前時期より鉄器普及が進行したことを示す。

これら鉄器の大半は、韓半島から日本海沿岸域を介して北陸地域にもたらされたものと考えられ、質・量ともに突出する八日市地方遺跡は、陸海交通の便に恵まれ、貴重な碧玉・ヒスイを多量に取り扱う、日本海沿岸域の東西をつなぐ交易の拠点的集落として機能していた可能性が高い。

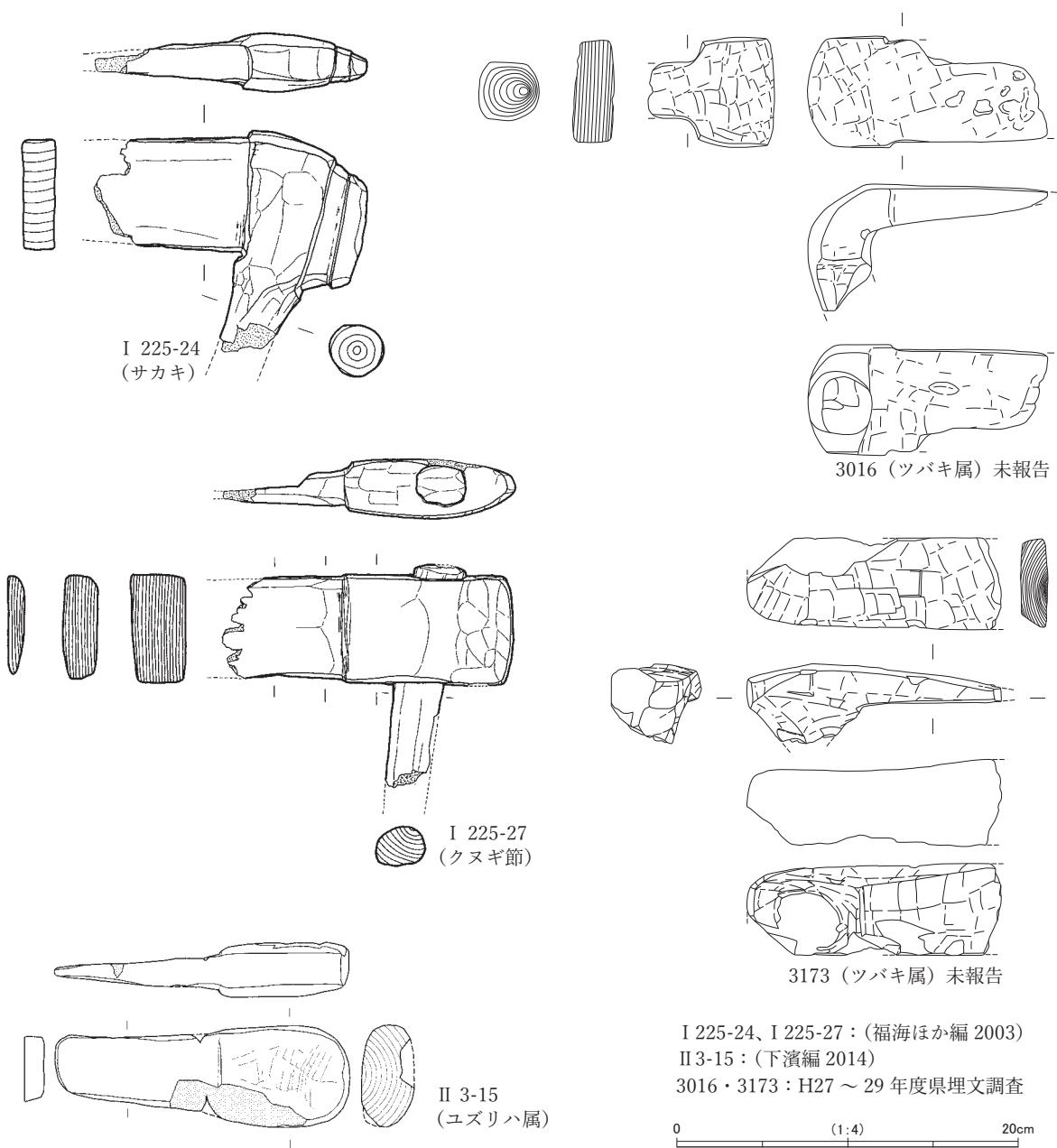
これを裏付けるように、鉄器導入期である弥生時代中期中葉の八日市地方遺跡からは、韓半島南部や北部九州地域と共に通する質量体系の石製円筒權（天秤權、写真3）が出土しており（武末2020）、これらの地域間で共通する基準や計量技術に基づく継続的な交易が行われた可能性を示唆する。

さらに、八日市地方遺跡の出土品整理が進められた結果、弥生時代中期前葉まで遡る可能性の高い鋳造鉄器片や、鉄製工具による加工痕を遺す木材が散見され始めた。これらの鉄器関連資料こそが、無文土器系土器とその文化を携えた集団の交流を示すものと推測され、今後の整理作業により、この環日本海を介したダイナミックな交流の実態、その交流を背景とした集落構造および各種手工業生産の変遷などに迫り得る資料を積み重ねていきたい。

本資料はこれまで確認された無文土器系土器の東限を示す。本資料の紹介が、既報告資料の再発掘へつながることを希望し、広く日本海を通じた韓半島金属器文化の拡散が検討される機運となることを期待する。

謝 辞

本稿をまとめるに際しては、下濱貴子、武末純一、中屋克彦、村上恭通からご教示・ご協力をいただいた（五十音順、敬称略）。文末ながら記して感謝申し上げます。



第6図 八日市地方遺跡出土の鋳造鉄斧柄〔縮尺1/4〕(弥生時代中期中葉～後葉)



写真2 柄付き鉄製鉈



写真3 八日市地方遺跡の石製円筒權

(註1) 本稿における無文土器、無文土器系土器の定義については山崎2020に拠る。これまで「擬朝鮮系無文土器」、「擬無文土器」という語が用いられてきたが、字義に照らし合わせれば、李昌熙の言うように擬○○土器は、○○土器を対象に模倣した土器である(李2009)。現在、日本で使われている『「擬」無文土器』は無文土器人が弥生土器の影響を受けて作った土器を主に指しており(後藤1979・1987、片岡1990)、日本での「擬」と韓国での「擬(類似)」を用いた語は混乱を生じているため、以下のように整理した。

日本では無文土器(水石里式土器・勒島式土器等)と無文土器系土器(変容無文土器・変容弥生土器(・影響を受けた可能性のある土器))があり、韓国では弥生土器(板付式土器・城ノ越式土器・須玖式土器等)と弥生系土器(変容弥生土器・変容無文土器(・影響を受けた可能性のある土器))が存在する。

(註2) 小松市教育委員会の既報告資料。資料調査では下濱貴子氏のお世話になった。北陸における無文土器系土器の評価は別稿を準備中である。

【参考文献】

- 片岡宏二1990「日本出土の朝鮮系無文土器」『古代日本と朝鮮』名著出版
河村好光2018「日本列島における弥生時代」『考古学研究』65-3
後藤直1979「朝鮮系無文土器」『三上次男博士領寿記念東洋史・考古学論集』記念論集編集委員会
後藤直1987「朝鮮系無文土器再論－後期無文土器系について－」『東アジアの考古と歴史 中』 岡崎敬先生退官
記念論集 同朋舎出版
佐藤由紀男・宮田明2018「石川県八日市地方遺跡出土の層灰岩製片刃石斧と三面石斧をめぐって」『考古学研究』65-3
下濱貴子(編) 2014『八日市地方遺跡Ⅱ 第4部 木器編』小松市教育委員会
下濱貴子(編) 2016『八日市地方遺跡Ⅱ 第7部 補遺編』小松市教育委員会
武末純一2006「韓国の鋳造梯形鉄斧－原三国時代以前を中心に－」『七隈史学』第7号 七隈史学会
武末純一2020「日韓の権」『新・日韓交渉の考古学－弥生時代－(最終報告書 論考編)』新・日韓交渉の考古学－
初期鉄器～原三国時代・弥生時代－研究会
中尾智行2018「弥生時代の計量技術」『考古学研究』第65巻第2号 考古学研究会
中屋克彦(編) 2019『小松市 八日市地方遺跡』石川県教育委員会・(公財)石川県埋蔵文化財センター
林大智2017「北陸における農工具の鉄器化について」『木製品からみた鉄器化の諸問題』シンポジウム記録10
考古学研究会
林大智2018「石川県小松市 八日市地方遺跡」『月刊考古学ジャーナル』No.714 ニューサイエンス社
林大智2019「木工具から読み解く木製品生産の動態」『古代学研究』222 古代学研究会
福海貴子・宮田明・橋本正博(編) 2003『八日市地方遺跡Ⅰ(第1分冊 本文・写真図版編)』小松市教育委員会
松本岩雄1992「出雲・隱岐地域」『弥生土器の様式と編年 山陽・山陰編』木耳社
安英樹2009「北陸における弥生時代中期・後期の集落」『国立歴史民俗博物館研究報告』第149集
山崎頼人2015「日韓青銅斧の研究－三沢北中尾遺跡出土青銅斧片の意義－」『古文化談叢』第74集
山崎頼人2020「無文土器から見た環有明海の日韓交流」『環有明海の弥生文化Ⅰ(弥生時代の集落)』吉野ヶ里遺
跡－軌跡と未来開催記念セミナー 佐賀県立博物館・美術館
山崎頼人・岩本真美・原田敏照2021「山陰における無文土器系土器－出雲地域を中心として－」『山陰弥生文化の
形成過程』島根県古代文化センター研究論集第25集
吉田広2010「弥生時代小型青銅利器論－山口県井ノ山遺跡出土青銅器から」『山口考古』第30号
吉田広2013「武器型青銅器の伝播と時期」『弥生時代政治社会構造論』柳田康雄古稀記念論文集 雄山閣
李昌熙2009「在来人と渡来人」『弥生文化誕生』弥生時代の考古学2 同成社